

## グローバル人材教育と英語ヒエラルキー —EMIの現場からの報告と提言—

山 本 英 一

このシンポジウムを通して「純ジャパ」という言葉の意味を改めて噛みしめることになったが、筆者は「純ジャパ」である。大学時代、確かに帰国子女が数名いて、とりわけ彼(女)らの聞き取り能力はずば抜けていた。到底「純ジャパ」には太刀打ちできない現実に只々無力感を覚えたものである。だが、そこに「ヒエラルキー」は存在しなかった。クラスの9割以上が「純ジャパ」だったから。大学の教室で「英語ヒエラルキー」を意識してしまうとは、さすがに日本もグローバル化したものである。

筆者は英語で専門科目を教えるEMI(English as a Medium of Instruction)に長らく関わっており、EMIの現場から英語コミュニケーション(教育)の問題を考えたい。結論から言うと、日本の高等教育では英語の位置付けが誤っており、英語によるコミュニケーションの重要性が、結果として矮小化されたままの理解に留まっている。

英語とは、コンテンツを理解し発信するためのツールだとの認識はあちらこちらで繰り返し喧伝されているにもかかわらず、その実、英語の授業は其中で閉じている。大学にはさまざまな専門領域があるにもかかわらず、そのコンテンツと英語とは多くの場合ほぼ没交渉なのだ。「英語で何をしたいのか」と学生に聞いても、「TOEIC/TOEFL/IELTSなどの成績を上げたい」という回答が圧倒的に多い。せっかく学んだ専門知識(コンテンツ)と英語表現とを結びつける意識がいつまでも育たないのだ。

EMIの立場から大学教育を俯瞰すると、ますます複雑化する社会の問題に対応できる学生を育てるには、専門分野のトピックを通じて、3C(Critical Thinking/ Creative Thinking/ Communication Skills)の練磨が重要となる。Critical Thinkingは当たり前を疑う習慣、Creative Thinkingは新たな仮説を立てる試みであり、Communication Skillsはそこから生まれた思想・思索(コンテンツ)を巧みに言語化する能力である。少なくとも大学が目指すべき英語によるコミュニケーションとは、学生たちが各々の専門分野で学ぶプロセスを通して結実させた思想・思索を言語化し理解を深め、それを相手と共有する営みのことである。言い換えれば、英語とコンテンツがめでたく結ばれてはじめて、先に指摘した英語コミュニケーションの矮小化問題が解消されるのである。

「純ジャパ」を悩ませるヒエラルキーは英語の流暢さに大きく依存する。しかしながらCritical Thinking/Creative Thinkingに裏打ちされぬ言語能力は空虚であり、憂慮すべき階層はむしろコンテンツ理解の深度にあることを心に銘記すべきである。

